

イランの仏教遺跡

入 澤 崇

1. イランに入る

2002 年に考古学者の樋口隆康氏（京都大学名誉教授）がテヘランの国立考古博物館でガンダーラ様式の仏像 19 体を確認し、それがイラン・ファールス州の遺跡から出土したものとして紹介され話題となった（2002 年 5 月 14 日付新聞各紙）。が、すぐにイラン国立考古博物館はそれらの仏像がアフガニスタンからの密輸品である声明を発表し、日本での新聞報道を否定した（2002 年 5 月 16 日付新聞各紙）。イランには仏教は伝わっていないというのが今もってイランの公式見解である。この見解はイラン独特のナショナリズムから出ているもので必ずしも学術性を伴っているというわけではない。仏教は果たしてイランにまで伸張していたかどうか、そろそろ本格的に調査研究する時期が到来してきたように思われる¹⁾。

イランへの仏教伝播に関して、すでに W・ボールが 1989 年に非常に興味深い報告を発表している²⁾。イランに仏教遺跡が 4 箇所ほどみられるというもので、彼はペルシア湾沿岸ブシェール近郊のチェヘルハーネー（Chehelkhāneh）石窟とハイダリ（Haidari）石窟、イラン北西部マラーゲ近郊のラサットハーネー（Rasatkhāne）石窟とヴァルジュヴィ（Varjuvi）石窟の 4 箇所を挙げている。イランに仏教が伝播していたかどうか、まず、ボールが指摘する遺跡の検証から始めることにしたい。

昨年（2008 年）10 月にわれわれ龍谷大学プロジェクトチームはイランに入り、上記の遺跡をすべて調査することができた³⁾。本稿は上記の遺跡のうちイラン北西部のヴァルジュヴィ遺跡に焦点を当てるものである。

イランへの仏教伝播を見る上で、以下の 3 つの視点をもつことが必要となろう。

1) 今のアフガニスタン・トルクメニスタンを経由するルート、2) インドからペルシア湾への海上ルート、3) 13 世紀のモンゴルの西進ルート。今回取り上げるヴァルジュヴィ遺跡はモンゴルの西進と大きく関わる。

2. ヴァルジュヴィ遺跡

イラン北西部、東アゼルバイジャン州の州都タブリーズから南へ130kmの地点にマラーゲという町がある。遺跡はマラーゲの中心から南へさらに約8kmのヴァルジュヴィ村に位置する。遺跡周辺はいま広大な墓地となっており、墓地の北西部に二つの石窟が存在している（便宜上ヴァルジュヴィⅠ、ヴァルジュヴィⅡと呼ぶ）。石窟といっても断崖に洞窟を掘る形態ではなく、地下に洞窟を開いているものであり、地下壕とみなした方がいかもしれない。

まずヴァルジュヴィⅠ。北側に窟口を開いた入口前室を進むと四方形の主室（11.3m × 6.5m）があり、さらにまっすぐ進むと円形の奥室（直径約6m）に至る。前室、主室、奥室が一直線上に並ぶこの規模の大きい建造物はパルティア時代（前248～226）に造られたミスラ教の神殿跡といわれているもので、イランのミスラ教神殿跡としては極めて貴重な遺跡である⁴⁾。主室には聖典クルアーンの一節を刻した碑文がみられ、ミスラ教神殿が後にイスラームの建築物として再利用されたことがうかがえる。入口前室に面して左側には後代に増築された部屋がみられるも、破損が激しい。

いまひとつの遺跡、ヴァルジュヴィⅡはミスラ教神殿の西北約100mの地点にある。W・ボールは1989年の報告で、このヴァルジュヴィⅡの石窟写真を掲載してヴァルジュヴィを仏教遺跡として紹介した。この遺跡に存在する横に並ぶ壁のくぼみは一見すると仏龕が列をなしたもの、列龕のように見える。この列龕の存在ゆえに、これをボールは仏教遺跡とみなした。しかし、子細に検討すれば、その壁のくぼみは仏龕とは明らかに違う要素がみてとれる。まず、壁面くぼみの底はえぐれていて仏龕のありようとは異なる。さらにくぼみの下には穴があって、水抜き構造を具えている。これは家畜のためのいわば飼い葉桶の役割を果たしていたものとみなされる。馬や羊が飲み食いをするための構造物が仏龕に似ていることは注意を要する。

仏教の痕跡はヴァルジュヴィⅠの方に見出せる。ミスラ教神殿の一画に仏教寺院を建て増した痕跡がみられるのである。それは前室左側の空間である。9m × 8.5mのほぼ正四方形の部屋であるが、天井は破壊されている。残存する天井までの高さは約3m。室内で目につくのが中央の柱である。それは最大直径幅4.3mの八角形の形をしている。八角形の中心柱はヴァルジュヴィ遺跡のどの房室にもなく、ここだけにしかみられない。この部屋はミスラ教神殿の付属建造物ではあ

り得ない⁵⁾。

中央の八角柱には一面ごとに小さい龕を4つ配置する仕様が見られ、龕のない面は表面にあったものが徹底的に剥ぎ取られた痕跡が見てとれる。八角柱に面する周囲の壁にも龕の存在が確認できるが、天井といい、その周囲の壁といい破壊のすさまじさが特に際立つ。

龕を有する柱を石窟内部に配置するというのは中央アジア、中国華北の仏教石窟のひとつの大きな特色である。それは中心柱窟と呼ばれるが、このヴァルジュヴィの事例はまさに中心柱窟の構造を示すものであり、中心柱を巡り歩く繞道が中心柱窟の実践的性格を示している。

主尊を柱の正面に据える方柱の中心柱窟では、中国・新疆ウイグル自治区のキジル石窟が著名である。キジル石窟ではヴァルトシュミットによる第2期（7世紀頃）に分類される石窟において中心柱窟が隆盛しており、それら中心柱窟では後廊に涅槃関係の図像が見られる例が多い⁶⁾。中心柱窟は中国華北ではとりわけ愛好されたとみえ、敦煌莫高窟（例えば第257窟や260窟）でも、雲岡石窟（例えば第1窟）でも造られた。中国華北の中心柱窟は北魏時代に造られた例が多い。その場合、中心柱は塔柱ともいうべきもので、明らかに仏塔を意識している。中国石窟の中心柱と仏塔は関係が深い。

石窟空間で中央に柱を掘残し、そこに主尊を据え、柱の周囲にも龕を作り礼拝対象を置くという構造は仏教以外には知られていない。石窟空間において中心柱が存在する。この点で、このヴァルジュヴィ石窟の八角柱窟は小規模ながらも仏教寺院であるとみなせる。

方柱を中央部分に掘残した例であればフィール＝ハーナ石窟やバサーワル石窟などアフガニスタンにも知られるが、八角形となるといまのところ例がない。柱が八角形ということに注目すれば、その事例は甘粛省に残る石窟の中心柱窟に見ることができる。甘粛省東部の慶陽北石窟、それに王母宮石窟である⁷⁾。いずれも北魏時代に造営されたという。中心柱の下部分は四方形で上部が八角形というもので、直接ヴァルジュヴィの中心柱に繋がるわけではないが、中国華北に八角形の中心柱を作るアイデアがあったことに留意しておきたい。

中国遼（契丹＝キタイ）の時代に八角形の仏塔が盛行するが、契丹民族が八角形をことのほか愛好したことは注目される⁸⁾。内蒙古自治区赤峰市域に複数残る遼代の八角塔は、石窟内部に八角形の中心柱を造り出す技術の伝播という点からすると気に留めておかねばならない建造物であろう。

さて、ヴァルジュヴィ遺跡の八角柱窟に続く小室にも列龕があり、この空間も仏教窟の可能性が高い。八角柱窟とこの小室は仏教徒が異教の神殿を増改築し、仏教寺院に仕立て上げたとみなせる。ヴァルジュヴィの遺構はまずパルティア時代にミスラ教神殿が建立され、ミスラ教がゾロアスター教に吸収されていくなか、この神殿は役割を終え、その後、仏教徒の手によって仏教寺院が増築された。そして、激しい廃仏があり仏教寺院が壊され、中心柱だけが残った。その後、ミスラ教神殿跡はイスラームの建造物として再利用され、サファビー朝時代（1502～1736）には墓所として用いられていたらしい。

では、仏教窟はいつ、誰の手によって建立されたのか。このヴァルジュヴィの仏教窟の遺構は、ある特定の歴史環境のもとにおいて捉えることが可能である。

3. イルハン国の仏教徒

すでに述べた通り、このヴァルジュヴィの遺跡はイラン領のアゼルバイジャン地方のマラーゲという町にある。このマラーゲこそは、イランに進出したモンゴル勢力が最初に都をおいたところであって、タブリーズと並んで初期イルハン朝の重要拠点であった場所である。

バグダートのアッバース朝を倒したフレグ率いるモンゴル勢力は1260年にアゼルバイジャンに入って、イルハン国（フレグ・ウルス）を建国する。そのとき都（首邑）としたのがマラーゲであった。イルハン国2代目のアバカのとき、都はタブリーズに移った。

フレグによって始まるイルハン国はイスラーム化したモンゴル勢力として知られているが、イスラームに改宗したのは、7代目の王ガザンで、彼は仏教からイスラームに改宗した。1295年のことである。

イルハン国の創始者フレグにせよ、イスラームに改宗した七代目の王ガザンにせよ、彼らがそもそも仏教徒であったことがこの際重要となる⁹⁾。さらにイルハンにはインド、ウイグル、中国から優秀な人材が集まっていたことが判明している。なかに仏教徒がいたとしても不思議ではない。イスラームに転じたガザンのとき、イルハン領内で徹底した廃仏が行われたことが『集史』に出てくる。

周知のように、『集史』とはガザンの宰相であったラシード・アッディーンがペルシア語で書いた歴史書である。イラン人の学者の他に中国人（ヒタイ）、カシミールの仏僧、キリスト教徒、ユダヤ人学者などが協力して、「諸々の歴史を集めたもの」（Jāmi' al-Tawārikh）が編纂され、わが国では『集史』として知られる。『集

史』の最初がモンゴル史で、序文によればモンゴル史編纂にはガザン自身が大きく関わっている。モンゴル史のなかで、イルハン国のイスラーム化していくありようも語られている。

とりわけ注目すべき部分は、君主ガザンがすべての偶像を破壊せよと命じ、偶像寺院（仏教寺院）と拝火教寺院（ゾロアスター教寺院）が破壊されたことが記述されている箇所である¹⁰⁾。仏教僧はことごとくイスラームに改宗させられたとも言われている。裏を返せば、アゼルバイジャン地域に仏教寺院、ゾロアスター教寺院が存在していたことになる。ガザンが改宗を迫りすぎたのか、ガザンの別の命令では「汝らの中で望むものは誰でも、インド、カシミール、チベットの諸地域へ、あるいは自らの故郷へ去れ」とも言っている。他に、高官たちがガザンに言った言葉として、「あなたの父君は、寺院を造り、自分の肖像画をその建物の壁に描いていた」というものもある。「あなたの父君」とは、ガザンを仏教徒として育てた父アルグンのことである。アルグンは仏教に心酔した王として名高い。

イスラーム改宗以前のイルハン国には仏教徒は存在したし、仏教寺院は確実に建立されていた。イルハン国に関して最も精緻な研究をなされた本田實信氏は、『モンゴル時代史研究』の中で「イルハン国初期に建立された仏寺の跡が現在全く見出されないのも、モンゴルのイスラーム化の結果であろう」（227頁）と述べられた。しかし、マラーゲに破壊された仏寺跡は残っていた。ミスラ教神殿のごとく、イスラーム化する以前に遺跡として残存していた遺構を追跡していけば、仏教の痕跡はさらに見つかる可能性はある。イランに入ってきたモンゴル勢力はウルミア湖の周辺、このマラーゲとタブリーズ、そして今のトルコ東部・ヴァン湖周辺を主な活動拠点とした。今後、湖周辺に残る遺跡の徹底調査が望まれる。

ところで、イスラーム化する以前のイルハン国の仏教とはどのようなものであったのであろうか。モンゴルといえばチベット系仏教がすぐに思い浮かぶが、イルハン国にはウイグル人も存在していたし、ウイグル仏教の存在も考えられる。カシミールから来た仏僧もいた。『集史』に語られるインド仏教に関する部分はカシミールの仏僧が語った情報を基にしている。イルハン国にはキリスト教やユダヤ教も存在しており、モンゴル遊牧民特有のテングリ（蒼天）信仰も当然みられたはずである。イラン北西部を中心に形成されたイルハン領内には多様な宗教が存在しており、仏教の場合も複数の仏教が想定できよう。忘れてならないのが中国人の存在である。

注目すべきは、中国華北からの有能な人々がフレグに伴われてアゼルバイジャ

ン地方に入っていることである。フレグに率いられた中国人の中には天文学者もいた。『集史』の第二部「中国史」の序文にそのことが出てくる¹¹⁾。マラーゲで著名なのは1259年に完成したという天文台であるが、これはフレグがナスィール・アッディーン・トゥースィーに建立させたもので、当時のイスラーム天文学の拠点となった所である。イスラーム天文学と中国天文学とは明らかに交流があった¹²⁾。フレグに同行した中国人は医者や学者も含まれ、彼らは華北出身者（ヒタイ＝キタイ）であったと言われているが、工人や職人集団もいたことであろう。果たしてこの中に仏教徒がいなかったかどうか。ヴァルジュヴィ石窟にみられる八角柱のアイデアが甘肅省の石窟にみられ、八角形の仏塔をゆきわたらせた遼の技術水準を考えるならば、マラーゲに中国華北から移住してきた仏教徒を想定してもあながち無理ではなかろう。

ガザンのとき、都であったタブリーズには、ガザンの名を冠したガーザーニーヤという地区の他に、宰相であったラシードの名を冠した「ラシード区」があったという。ラシード区にはイラン人の他に、インド人やヨーロッパ人の学者と共に中国人がいたことが知られている¹³⁾。ちなみに、『集史』の「中国史」は3人の中国仏教僧が書いたものが原本であると『集史』で語られている。陶磁器の様式やミニアチュールの中国画法、それに宮殿装飾のタイルに見られる龍と鳳凰の組み合わせといったように、中国がイランに与えた影響は小さくない。さて仏教はどうであったか。イスラーム化する以前、多様な宗教のありようを示すイルハン国にあって、ヴァルジュヴィの八角柱窟は中国から移住してきた仏教徒が関わっているのではないかとこの考えを提起しておきたい。

果たしてイルハンの領内にどれほど仏教が広がっていたか。最近、トルコ東部ヴァン湖周辺でイルハン時代のものとおぼしき遺跡の発見があったと聞く。仏教の痕跡があるかどうか確認を急ぎたい。

4. 仏教徒による仏寺の破壊

仏寺の破壊に関して一言述べておく。ヴァルジュヴィ遺跡の八角柱窟はすさまじい破壊の爪あとを残しており、まさにガザンの廃仏を裏書きするものである。ここで、仏教徒であったガザンが仏寺の破壊を行なったことに改めて注意を喚起しておきたい。イルハン国はイスラーム化した王朝であることは指摘されることはあっても、それが仏教を捨てたものであったことは意外と注意を引いていない。しかも、仏寺の破壊は仏教徒自身の廃仏であったことはこれまでほとんど顧みら

れていない。イランのイスラーム勢力が仏寺を破壊したのではなく、仏教徒であるモンゴルの君主が仏寺を破壊した。この事実は、「モンゴルとイラン」あるいは「仏教とイスラーム」、さらには昨今しばしば取沙汰される「宗教的寛容」を考えるうえで貴重な素材となり得る。

仏寺破壊の野蛮さを指摘するのはたやすい。しかし野蛮さの向う側にあるものを見ることも必要である。本田氏の研究によれば、ムスリムとなったガザンが君主の地位についたとき、イルハン国の国庫は空であったと言う¹⁴⁾。疲弊していたイルハン国を立て直すために、ガザンは宰相ラシードと共に財政再建に取り組み、イラン社会の現実に見合った税制を断行することで、イスラームの帝王として君臨した。このモンゴルのイスラーム化によって、イスラームが拡大していき、モンゴル帝国の拡張がみられるようになる。兄ガザンの後を引き継いだオルジェイトゥのとき、モンゴル帝国はかつてない平和状態に包まれ、イルハン国の歴史を通じて最も繁栄した時期を迎えたという¹⁵⁾。その下地をつくったのはガザンである。ガザンが仏教を捨てイスラームに転じた結果、和の構築がなされたことをわれわれ仏教者はどのように受けとめたいのだろうか。

モンゴル帝国は過剰な暴力で異文化を蹂躪したのではない。人々の心をつかむことによって広大な地域を支配したのである¹⁶⁾。ガザンによる仏教からイスラームへの改宗は、アジア仏教史の展開をみるうえでもイスラームの拡大を見るうえでも、そして生きとし生けるものどもの共生を考えるうえでも重要なポイントになろうかと思う。

かつてマラーゲの天文台が立っていた丘にも石窟（ラサットハーネー石窟）があり、W・ボールはそれを仏教石窟であると指摘する。この点については若干疑問もあり、今後さらに検討していく。また、ペルシア湾沿岸の二つの石窟のうち、チェヘルハーネー石窟は仏教石窟の可能性が極めて高い。これもイルハン国に関わる遺構なのであろうか。稿を改めて論じたい。

1) イラン東部ニシャープールの博物館に小型の仏像が所蔵されており（*Report of the Iran-Japan Joint Research on the diffusion of Buddhism in Iran* 2005, p.84）、もしそれがニシャープールから出土し、そこに寺院遺構が確認されれば、アフガニスタン・トルクメニスタンを経由した仏教がイランにまで及んでいたことになる。

2) Warwick Ball, “How far did Buddhism spread west? Buddhism in the Middle East in Ancient and Medieval Times”, *al-Rafidan*, 10, 1989.

3) 2008年9月30日から10月25日まで、龍谷大学学術調査隊はトルクメニスタンとイ

(222)

イランの仏教遺跡 (入 澤)

ランで遺跡調査を行なった。メンバーは山田明爾（龍谷大学名誉教授）、井上陽（龍谷大学非常勤講師）、入澤の3名。この調査では、トルクメニスタン南部のアフガニスタン国境付近でこれまで学界未報告のトルトデシク石窟を確認し、その後陸路でイランに入り、W・ボールの指摘した4つの遺跡を調査してまわった。

- 4) Parviz Vardjavand, "The Imāmzāde Ma'sum Varjuvi near Marāgha", *East and West*, vol.25, Nos.3-4, 1975.
- 5) Warvic Ball, "The Imamzadeh Ma'sum at Vardjovi : A rock-cut Il-Khanid Complex near Maragheh", *Archaeologische Mitteilungen aus Iran*, Band 12, 1979. この論考でボールはヴァルジュヴィ I に仏教の痕跡を見てとり, pillar-cave として言及するが, 八角形の中心柱については特に関心は払われていない。
- 6) 宮治昭『涅槃と弥勒の図像学』p. 492.
- 7) 『隴東石窟』（中国・文物出版社）pp. 4, 10.
- 8) 押尾式春は『契丹仏教文化史考』（1932, 1982年に復刻）の中で、遼代仏塔の特異性に注目して、八角形で多層構造の仏塔を契丹民族固有な文化の表現と位置づけた。
- 9) 本田實信『モンゴル時代史研究』p. 226, 杉山正明『興亡の世界史 09 モンゴル帝国と長いその後』p. 210.
- 10) Али-заде, А.А. (ed.) и Арендс, А. К. (tr.), Рашид ад-Дин, *Джами' ат-Таварих*, том III, Баку 1957, 396-398 (アリーザーデ校訂本), Rasīdd al-Dīn Ġami' al-Tavarīh, mss. Istanbul Topkapı Sarayı Müzesi Kütüphanesi, Revan 1518, 300a-300b (イスタンブール写本)。昨年の調査終了後、モンゴル史専門家の村岡倫氏に上記『集史』ガザン紀を読んでいただいた。『集史』の内容については村岡氏の翻訳に基づく。ご多忙の中、時間を割いてくださった村岡倫先生に心から謝意を表す。
- 11) 『集史』「中国史」の序文は本田實信氏によって翻訳されている。本田前掲書, 397頁。
- 12) マラーゲの天文台があった場所は現在史蹟となっており、天文台が復元建立されている。マラーゲの天文台は多くの科学者を擁する研究施設だったようで、後世の天文学に多大な影響を与えた。元の時代に大都（北京）に創設された天文台（回回司天台）とも密接な関係をもっていた（本田前掲書, p. 232）。
- 13) 本田前掲書, p. 404.
- 14) 本田前掲書, p. 265, 333.
- 15) 杉山前掲書, p. 213.
- 16) 村岡倫「モンゴル帝国の真実」『北方世界の交流と変容』所収、参照。ガザンのイスラーム改宗は、土地の人たちと「イル（仲間）となる」ことであったと解せる。「イルとなる」ことがモンゴル帝国にとっていかに重要であったか、またその概念がこれまでいかに誤解されてきたかについては、杉山前掲書 129 頁以下に指摘がある。

(平成 21 年度科学研究費・基盤研究 (B) による研究成果の一部)

〈キーワード〉 イラン, マラーゲ, 石窟, 中心柱, イルハン国, ガザン

(龍谷大学教授)